【調査報告】

中国の大凉山彝族における葬送儀礼に関する調査報告

樊　秀麗
広島大学大学院国際協力研究科
教育文化専攻　大学院生
〒739–8529　東広島市鏡山1–5–1

１．はじめに

筆者は，1997年7月26日から8月28日までの間「中国の彝族における葬送儀礼の人間形成機能に関する考察」というテーマのもと，中国四川省凉山彝族自治州においてフィールド・ワークを行った．ここでは，このフィールド・ワークにもとづき畢摩[1]（ビモ）文化研究者たちとともに，畢摩とよばれる祭司に対して行った聞き取り調査から知り得た事柄をまとめた．記述した内容は，畢摩からの聞き取りに際し，美姑畢摩文化研究センターの勒格楊日氏（現地の畢摩文化研究者）による彝語から漢語への通訳を介し，さらに中国社会科学院少数民族文学研究所副研究員巴莫曲布嫫女史による説明を参考にして理解したものである．筆者は彝族の言語も解せずに，6日間にわたって短期間彝族の民家に住み込み住民とともに生活を行う中での調査であったから，彼女らの援助によって聞き取りができたことは何よりも幸運であったといえる．本稿は，日本に帰国後，調査結果の整理の際，聞き取りの内容に関係する文献を参照しながらまとめたものである．彝語の表記に関しては，調査中聞き取った音を便宜的に中国の漢字を用いて表記した．以下の本文に示したカタカナならびに漢字による表記は，それらの漢字の発音をそのまま表したものである．

２．凉山彝族の文化的背景

彝族は，他の民族がそうであるように豊かな伝統文化を持っている民族である．中国の西南地域に住む多くの少数民族のうち，最も数の多いのが彝族であり，居住分布が最も広く，家支[2]が最も多いのも彝族である．1990年の国勢調査の統計によると，彝族の総人口は6,572,173人に達しており，中国の少数民族中第６位に位置づけられる．また，「大分散，小集住」という分布形態で，四川，雲南，貴州，広西の４つの省に居住し，中でも四川省凉山彝族自治州（図１参照）は最大の居住区である．

四川省の凉山彝族自治州は中国四川省の西南部に位置し，面積は約63,000km^2，総人口382万人のうち彝族が162万人を占めている．州都は西昌市である．この自治州は高山と深谷に隔てられているため，歴代の中央王朝のこの地における統治はいずれもみな有名無実であった．また，数千年来，奴隷制度を踏襲し続けていた．地理上の天然の障壁と，社会制度上の障壁とが自ずと一体となり，経済発展が比較的緩慢であったため，この地の彝族の伝統文化は完全な形で保たれ，独自に発展した．凉山のこのような地理上，文化上，社会制度上の特殊性から，今世紀以降，海外の学者は凉山をIndependent Stateと呼び，凉山彝族をIndependent LoLoと呼んだ．1956年凉山は奴隷制度を廃止し，奴隷制から社会主義体制へと移行した．

凉山彝族は，自らを「諾蘇」と称し，民間によく知られた伝説では，凉山彝族の直系の祖先は，いまから２千年あまり前の古候，曲涅という二つの彝族の祖先の父系部落であり，ズーズープウというところ（現在の雲南省昭通一帯）に住んでいたという．古候系は凉山東部の雷波，峨辺，馬辺，美姑，甘洛の諸県に分布し，曲涅系は凉山西部の越西，昭覚，喜徳，冕寧，塩源，西昌の諸県に分布している．また創世史詩『勒俄特伊』と歴史典

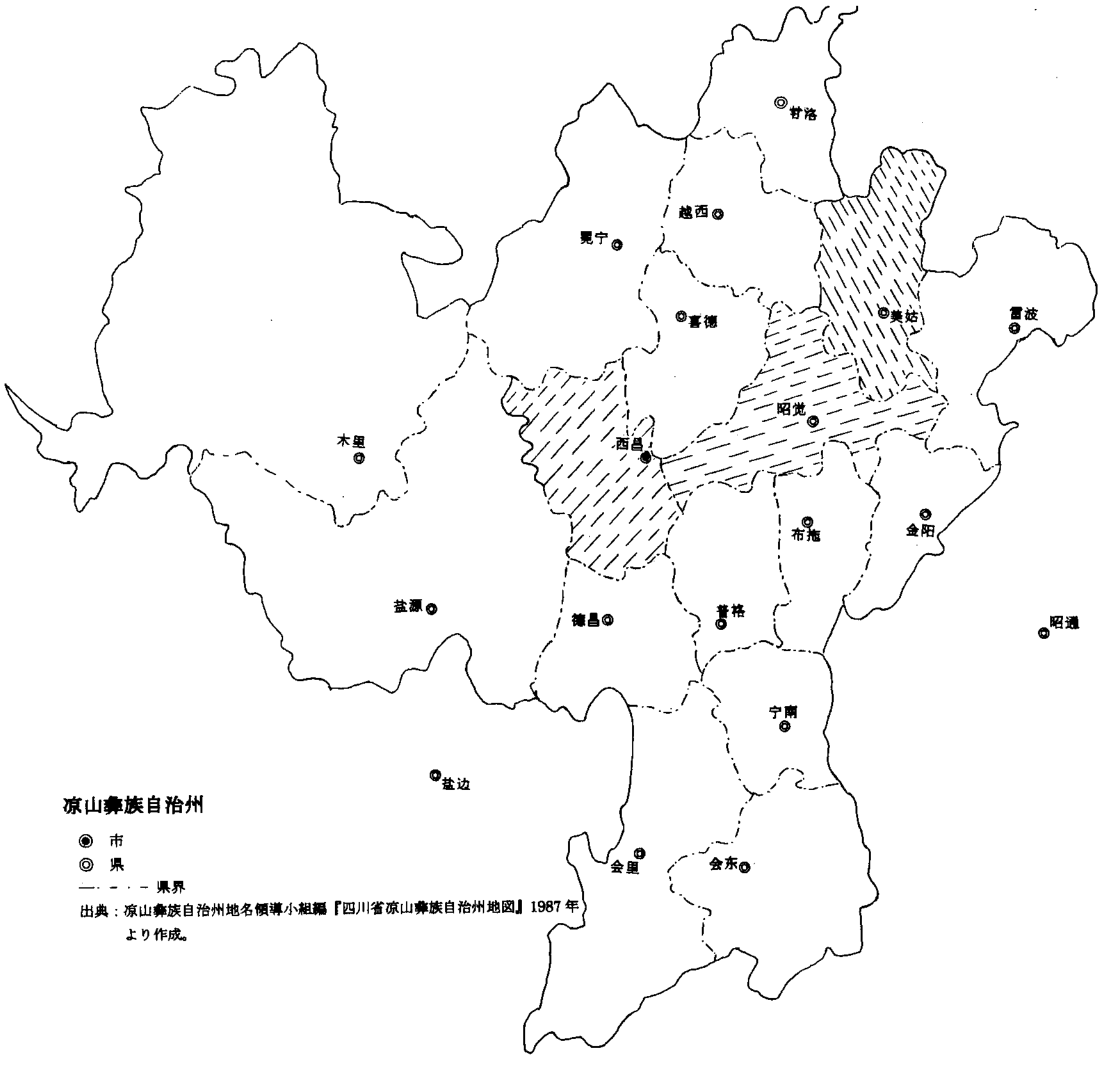


図1　凉山彝族自治州

籍『公史伝』,『母史伝』の記載によると，彝族の祖先は本来「母のみを知り，父を知らない」という母系社会であったとされ,「石爾俄特の父探し」は凉山の婦女子ならだれでも知っている伝説である.彝族には代々伝えられた母娘の家系図があり，後に父子の名を連ねたものが現れる．今日まで伝えられている凉山彝族の系譜によると，最も長い家系は300余代，普通のものでも70代以上になる．彝族の祖先が雲南から凉山へ入ったのは，今から少なくとも2000年程前であるとされる．

凉山彝族は，千数百年来，この古い文化と不思議な伝説，すばらしい景観にあふれた土地で，中国彝族の中で最も素朴な，独特の文化伝統を継続しており，その中で，天文，占星術，歴法，民俗を含めた独特な民族文化を作り出してきた．それゆえ，凉山彝族は，中国彝族の中で最も鮮明な地域文化的特徴を持つ彝族の重要な系譜として，中国内外の学者の注目を集めている．

調査の対象となった四川省凉山彝族自治州，美姑県の地理的環境は，大凉山の中腹地帯にあり，

地勢は東北から西南に傾斜し，最高標高3,961m，平均標高約2,000m，最低標高800mに位置し，美姑河が北から南に県内を縦貫して流れている．気候は高原性気候である．97% 以上の人が彝族である．ここでは外界から閉ざされた居住地域によって，彝族の伝統文化が十分に保存されている．彝族は民族独特な固有の文字を有する．涼山彝族にとっての伝統的な農作物としては，耐寒性の植物である苦蕎麦，燕麦が主要な作物であり，トウモロコシ，ジャガイモ，豆類なども多く栽培されている．主食は，苦蕎麦，トウモロコシ，ジャガイモである．彼らは平屋根木造矩形の家屋に住む．この家屋は，衝立で仕切られた三つの部屋をもち，土間式で，日常生活の中心は「鍋庄」とよばれる囲炉裏である．彼らの社会は，一般に氏族単位の村落を基盤とし，父系氏族集団の発達が顕著である．とくに部族的，氏族的結合が強い涼山彝族では，始祖から父子連名で繋がる系譜を結びとする「家支」（父系氏族集団）が社会の基本単位として発達している．また，かつて涼山彝族社会では，黒彝（貴族），白彝（平民），奴隷の社会階層の分化が著しく，互いに通婚は禁じられていた．涼山彝族の信仰は主に万物有霊の自然崇拝と祖先崇拝である．このうち祖先崇拝の発展は涼山彝族が家支に基づく社会であることと深く関係している．これを司る者が畢摩で，あらゆる彝族経典に通暁し，とくに葬送儀礼の活動は畢摩が司る．

３．調査対象と調査方法

１）調査対象：中国四川涼山彝族自治州，西昌市，昭覚，美姑県（中心として）を調査対象とした（涼山彝族自治州は州都の西昌市以外，現在でも未開放地区であり，外国人の訪問は基本的に許可されていない）．

２）調査方法：中国社会科学院少数民族文学研究所副研究員巴莫曲布嫫女史，涼山彝族自治州彝族研究所研究員馬爾子氏及び美姑畢摩文化研究センターを通じて，フィールド・ワークを行い，主として聞き取り調査を行った．その際，とりわけ，畢摩文化研究所の人々と共に，畢摩と呼ばれる祭司に対して，村，部落で行われている葬送儀礼及び人間形成にかかわる実際，及び解釈・方法について，聞き取り調査を行った．

３）インフォーマント：以下は，今回の聞き取り調査におけるインフォーマントである．

A．涼山彝族奴隷博物館の館長瓦扎克己氏，男性．1997年7月28日午前，西昌涼山彝族奴隷博物館で，聞き取り調査．漢語を使用．

B．涼山州民族研究所研究員馬爾子氏，男性，39歳．1997年7月29日，西昌から美姑に向かう道中，マイクロバスで，聞き取り調査．漢語を使用．

C．涼山民族研究の編委阿魯斯基氏，男性，65歳．1997年8月6日午後，西昌で，聞き取り調査．漢語を使用．

D．美姑畢摩文化研究センターの研究者達：勒格楊日氏，男性，摩瑟磁火氏，男性など，1997年8月8日午前，美姑で，聞き取り調査．漢語を使用．

E．曲比索莫氏，男性，80歳，畢摩．1997年8日午後，8月14日午前，美姑で，聞き取り調査．85代続いた畢摩の家柄。彝語から漢語への通訳者は勒格楊日氏。

F．曲比洛戈惹，男性，67歳，徳古[3]．1997年8月10日午後，河古洛郷洛覚村で，聞き取り調査．彝語から漢語への通訳者は勒格楊日氏．

G．曲比達戈氏，男性，32歳，畢摩．1997年8月11日午後，河古洛郷洛覚村で，聞き取り調査．63代続いた畢摩の家柄で，7歳の時から叔父に学び，17歳で畢摩として独り立ちした．彝語から漢語への通訳者は勒格楊日氏．

H. 曲比勒什氏，男性，49歳，畢摩．1997年8月12日午後，河古洛郷洛覚村で，聞き取り調査．60代続いた畢摩の家柄で，11歳の時から学び，19歳で畢摩として独り立ちした．彝語から漢語への通訳者は勒格楊日氏．

４）調査の主な内容：畢摩による彝族の葬送儀礼

畢摩による教育内容（万物の起源，史詩と神話，伝統教育，死生観，社会

倫理道徳教育

4．涼山彝族の葬送儀礼の種類

彝族の葬送儀礼は, 一般に三つの儀礼からなる．資料[4]と筆者の調査によれば，四川涼山でそれらは，ボーディエ[5]，マードゥディエ[6]，ツォビィ[7]と呼ばれている．

1）ボーディエ

彝族社会における葬俗としては，古くは伝統的な火葬（写真１，２，３参照）（まきを組み上げて火葬する風習）が行われてきたが，明代末，清代初から漢民族の影響を受けて，徐々に棺桶の土葬に変わっていった．しかしそうした中にあっても，涼山彝族の場合は，伝統的火葬のしきたりをなおも維持している．ボーディエとは，火葬を中心とした一連の過程を包括する儀礼である．ただし，生後一ヶ月未満の乳児とハンセン氏病で死亡した者は土葬にされる．

写真１　火葬場　巴莫女史提供

彝族におけるボーディエの規模は死者の年齢[8]によって定められる．年長者になるほど，或いは身分が高くなるほど盛大な儀礼になる．正月と祝祭日に家族が亡くなった場合，死体を箕か蓑で覆い，泣きもせず，死亡通知もしない．正月，祝祭日を過ごしてから，ボーディエを行う．

写真２　葬儀に参列する人達（巴莫女史提供）

写真３　火葬用の薪を運ぶ（巴莫女史提供）

死体整理：人が息を引きとる前に，死者が生前に自ら用意した綿羊一匹を引いてきて側にしばりつけておき，息を引き取る時に，彼を見守る人々が羊[9]を絞め殺し（刀で殺すべからず，叫び声を防ぐ)，死者の霊とともにあの世へ行くようにする．死後，家族は死者の容貌を整え，また，湯或いは酒で死体を洗浄して, 新しい服を着替えさせ, 男性なら，新しい服に着させ，頭巾をかぶせて，足に白い脚絆を巻き，その両足を折り曲げ，死者の手に羊肉をにぎらせ，両手を拳の形にして胸で

交差させる．老いた女性の場合，髪をとく時，二本の三つ編みを一本にして，この世を去り，冥界へ嫁に行けるようにする．それから，新しい服とスカートを着せ，新しいマントをはおらせ，蓮花の葉模様の帽子をかぶせる．色は青色で，赤や黄色や派手なものは使用しない．未成年の場合，結婚をしていないので，純白の服を着せ，純潔を表わす．老いた死者なら，白い敷布で覆い，口に銀の耳輪か銀の粒を入れ，囲炉裏の前のホウライチク（植物）で作った筵のようなものの上にその死体を置く．死体は横に寝かせ，男性なら左向き，女性なら右向きに寝かせる．それは，男性が刀を振り易く，女性が左手で羊の毛糸をひき易いようにするためである（写真４参照）．死者の出た家では，死者の家の貴重品を死体のまわりにかけたり，置いたりして，葬儀を示す．死者が畢摩だった場合，その死者が所有していた経書をすべて供奉して，会葬者の畢摩はそれぞれこの経書を一つ一つずつ唱え，畢摩の根が絶えぬことを示す．弔問客が羊肉を煮て食べてから，家族は泣き始める（この前には泣いてはならない）．

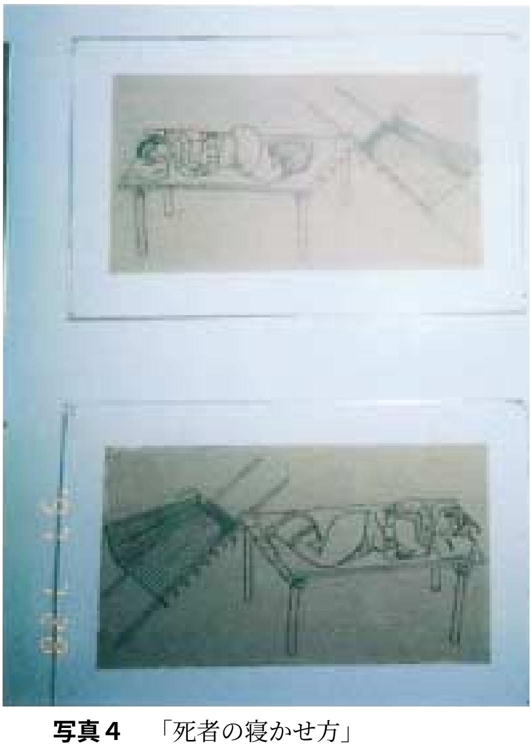


写真４　「死者の寝かせ方」
上：女性　下：男性
涼山彝族奴隷博物館蔵　1997年7月撮影

死亡通知：亡くなったその日か翌日，喪主が人を派遣して，子供や親族の家へ死亡の知らせを送り，親族は知らせをもってきた人のために豚や鶏を殺して接待する．いわゆる「サイバンポーシュエ」（まな板に血をつける）である．

弔い：子女や親家は老人の死の知らせをきいた場合，互いに知らせあい，弔いの準備をし，弔いに訪れる時，必ず酒を持ち，牛や豚や羊をつれて行かねばならない（写真５参照）．子供と親族及び同部落の友人たちは一緒に弔いに行き，死者の家まで数十メートルないし百メートル位に近づくと，泣き叫び，哀悼の意を表す．弔問客は死者の前につくと，両側に分かれて座り，泣き叫び，慰めあい，酒を飲みながら，死者の家族と親族に死者のほめ言葉とその生前の業績を述べ，慰安と死者への悼みを表す．嫁に出た娘は，自分の財力に応じて，羊（牛）や酒や新しい服を捧げる．牛なら，その二つの角を赤い絹布で縛め，二本の酒を吊り下げ，絹布の中に銀の粒を包み，傘のようなトマブキを掲げる．これを彝族の言葉で「パイイー」という．奉納品を贈る者は，死者の家まで500メートル位に近づくと銃を打つ．すると5，6人の親族が黒いマントを身にまとい，長い刀を持ち，彼らを出迎えて合流し，弔いに行く．年配者が亡くなった場合，悼みの歌を歌うが，彝族の言葉ではこれを「アークホ」[10]といい，歌手は2～4人の男性で，1，2組に分かれ，その中の一人が刀を持ち，歌を歌いながら踊る．

出棺：死体を2，3日或いは5～7日置いてから，吉日を見て出棺する．出棺は午前中に行う．まず，家族が死者を囲んで座り，泣き叫ぶ（夫妻のどちらかが先に亡くなった場合，相手は泣かない）．それから，畢摩を先頭に『指路経』中の「送霊経」を唱える．これは死者があの世へ行くための道筋を説くものである．そして親族と友人は家族を慰めて，家族を死体から離し，友人と近隣の人が，約3メーターの縦棒2本と横棒7～9本（女性なら7本，男性9本）を用いて，彝族の言葉で「イァルオ」という担架を作り，その上に死体を置き，外へ担ぎ出し，家族と親族は死体と別れる．このと

写真５　「葬儀を助ける」
涼山彝族奴隷博物館蔵　1997年7月撮影

き，雛鳥を数羽（死者の子供が決める）を持ち，畢摩を招いて「招魂経」によって招魂する．なお，死者を覆っていた白い布は幾つかに切って，死者の子供たちに配られる．それから4人の若い男が，死体を火葬場へ担いで行く．

火葬：火葬墓地は殆どの場合近くの東の丘や平野で，一つ穴を掘っておき，4本の柱を立て，東南西北の方位にあわせて「井」の形にする．穴の上に干した薪を女なら7層，男なら9層置き，死体の頭を東向き，足を西向きにして，死体を担いできた架台と下に敷いているホウライチクとともに薪の上に置き，木の枝で覆う．奉納品として，トウモロコシか蕎餅を一つ竹の箕に入れ，彝族の言葉で「クズ」という木ばちを一つ置き，中に水を入れ，彝族の言葉で「イーチー」という木杓を片側に置いて，4本の干し竹からなる松明をつくり，二人の焚き係が頭と足の両端から火をつけて火葬する．火葬する時，家族は皆帰り，友人か近隣の人が2，3人ないし7，8人火葬墓地からいくらか離れて，たき火をし，これを囲んで待ちながら，酒を飲み食事をする．火葬が済み（死体が灰になる），遺骨の灰が穴に落ち込むと，木ばちの水を地にまき，木ばちと木勺を砕いて捨てる．そして，穴を埋めて上に５つ，７つ，あるいは９つの石を置き，子孫繁栄の象徴とする．墓の上にトゲのあるホウライチクを置き，牛や羊が掘り出さないようにする．もし死者が遺言を残した場合には，火葬場に穴を掘らず，遺骨の灰を高い山へ持って行き，竹林や杉の林に撒き，子孫が竹や杉のように栄えていくよう祈ることもある．

祓穢：死体を焚いた後，畢摩は，家屋の側で一つ石を熱くして，神枝[11]を地に挿し，水を石にかけ，水蒸気があがっている間に，死体を焚いた人に道具（薪を切る刀，穴を掘る鋤など）を持たせて道具の上を渡らせる．これを彝族の言葉では「クーシー」といい，穢れを落とす意味がある．その夜，畢摩に家で死者の息を絶えさせた鬼を呪ってもらうが，これを彝族の言葉では「アシーイアォバー」という．なお，死者の家族は，数日後家を出て，隣家に１～５泊して，畢摩に死者の行先をみてもらう．

会葬後の食事：火葬後，会葬してくれた全員で食事を囲むが，その場で皆に平等に煮込みの肉と蕎餅を配る．ここでは身分の区分がなく，同じ場で食事をする．

なお幼児が死亡した場合は，果樹の根の下に土葬する．ハンセン氏病の死者は，普通火葬されず，死体は山奥に送られて，密封した木おけ二つが大きななべで覆われて，地下深く土葬される．

写真６　「マードゥ」
涼山彝族奴隷博物館蔵　1997年7月撮影

2）マードゥディエ

親の死後数日ないし数ケ月の内に，死者の家族は，畢摩に吉日を選んでもらって，火葬地へ行きマードゥ（位牌）（写真６参照，図２，３，４参照）を作って家に持ち帰り，供養し，これに死者の魂を付着させるが，これを彝族の言葉で「マードゥディエ」という．マードゥは神聖で粗末に扱ってはならない．正月や祝日や家族が病気になった時，これに酒や食物を捧げる．隠居に際しては，家屋と共に末子に渡し，末子がこれを祭る（一般に彝族では末子相続）．

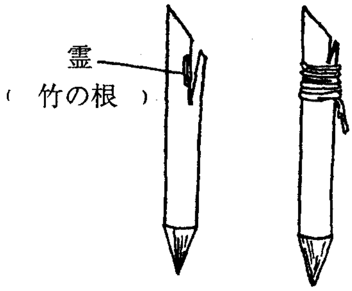


図２　マードゥ

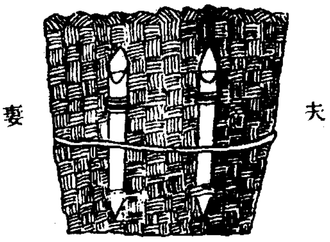


図３　竹の筵にさされた夫婦のマードゥ

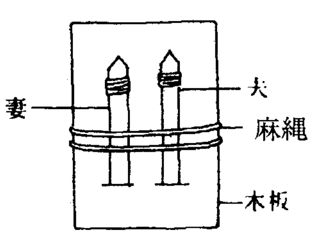


図４　板にまきつけられた夫婦のマードゥ
『彝族原始宗教調査報告書』参照

マードゥを作る前夜に，豚と泡水という酒を用意して，畢摩に鬼を祓ってもらう．翌朝親族は鎧を着，長い剣を持って墓で呼びまわって死者を目覚めさせる．そのうち，畢摩は墓の側に四列の神枝を立て（死者の年が奇数なら9本，偶数なら12本とする）列毎の末端に鶏を一羽づつしばりつけて，経文を読みながら，マードゥを作る．マードゥは16.6ｃｍの桃の枝とし，片端に長さ3.3cmの切れ目を入れ，さらにその棒の先端に小さな穴をあける．また山から竹の根を取ってきて薄片に切り，先ほどの穴に竹の根を一本差し込んで死者のシンボルとし，切れ目の頂上に秋に刈った羊の毛を一つまみ置くが，これが死者の服を表す．そして，それに赤と緑色の毛系をぐるぐる巻きつけるが，これが腰バンド（男性なら赤い毛糸で時計回りに九回巻き，女性は緑の毛糸で男性とは反対方向に七回巻く）を象徴し，さらにそれと同じ方向で麻糸を巻きつける．こうしてマードゥができあがる．畢摩が読経し，穢れを祓い清めた後，これを竹編みの容器に納め，死者の家の囲炉裏の左側の梁に吊り下げておく．これはすなわち諺にいう「父母終了要安葬，霊牌設在神位上（父母の埋葬終りて位牌は神位に在り）」である．その後，節句と正月など，年の節目のたびに，あるいは家に病人が出た時に，必ず酒と肉などの食品を供えて祭りをする．マードゥを家で祀って一年あるいは数年たつと，畢摩に頼んでツォビィを挙行してもらう．

吉克・爾達・則伙によると，マードゥと称される位牌を作る理由については，

> 「昔，人々は祖霊を招いてお供えをする時に，火葬の後に，額にある三角の小さな骨を取って使っていた．後に，よくしまっておかなかったので，この骨をネズミにかじられてもっていかれた．ネズミは，石の穴にもぐりこんだので，石をはらいのけて探したが見つからない．仕方がないので一粒のネズミの糞で代用した．不注意にもネズミの糞を竹林のなかに落として，またなくしてしまったので，今度は竹で祖霊をつくるしかなかった」[12]という伝説がある．

また，馬学良，于綿秀，範恵絹によれば，

「（伝説中の人類の祖先である）曲布以前には，人類は（今と違って）増えさかえることがなく，みな前後して死に絶えてしまった．曲布の時になって，マードゥをつくりはじめると，それ以来，人類は増えさかえたので，それで代々マードゥをつくるようになった」[13]とある．

さらに，伍精忠は，

「彝族の古代の習慣では，父母がなくなると火葬にして，子孫は遺灰の中から額の骨をひとかけら取っておき身につけて，それを祖霊とみなした．後にある時，移動中に，山の中で祖霊をなくしてしまって，あちこち探したが見つからない．ちょうど竹林のなかでなくしたので，しかたなく一片の竹の切れ端で代用することにした」[14]と紹介している．

3）ツォビィ

彝族の祖先崇拝は，父権性社会において著しく発展した．人々の祖先に対する崇拝は，彼らの生活の中で重要な地位を占めており，父母のために行うマードゥディエとツォビィとは，彝族の祖霊崇拝の特徴となっている．ツォビィとは，マードゥを送る儀礼のことである．また，祖霊が子孫の幸せを守ってくれると信じているため，マードゥディエとツォビィという祭典を盛大に行うのである．彝族では，死者の霊は決まった道筋を通って，祖先の地である雲南省に戻ると信じられている．そのため，畢摩は雲南省までの地名（図５）を読み上げげつつ『指路経』中の「送霊経」を唱え，魂が迷わないように導く．

親のマードゥは，数年或いは数十年ないし三世代後に，超度[15]というマードゥ送りの儀礼によって，人里離れた祖先のマードゥ安置所である洞窟に預けられる．このことによって，親の霊を象徴的なかたちで祖界へと帰らせる．普通，洞窟は一つの家支に一ヶ所というふうに限られている．ツォビィの規模はその家支の実力と経済事情によって異なるが，規模がどうであれ，ツォビィの日付けを決めると，同じ家支のすべての親族は，主催者に家畜と食料を奉祀しなければならない．また，それによって，後代の者の義務は完了するのである．マードゥを送る儀礼は，一家で行うこともあれば，幾つかの家が集まって行うこともある．祖先を祭り，死者の霊を祖先の住んでいるところに送るのは，五穀豊穣，家畜平安を祈るためである．祖先のいる場所は，シシムハダというところである．ツォビィを行わないと，死者の霊は祟るという．故に，ツォビィは，一族ひいては彝族全体の子孫繁栄に関わる儀礼である．ツォビィは，何世代も畢摩を代々伝えた家の畢摩でないと行うことができない．

涼山彝族地域の畢摩が行うツォビィは，15段階で，1段階ごとに一つの経典がある．ツォビィは，つぎの15段階のプログラムからなっており，この儀礼は一般に1日ないし3日間で完了する．もっとも盛大な場合は多数の家畜を犠牲にし5〜15日間もかかる．

1．ニツヅア，もしくはジュジョといい，呪鬼をする．
2．グッグトといい，マードゥをつくる．
3．チャジャといい，祖先の霊をよび，食事をだす．
4．ムーニードゥといい，参加者が犠牲を叩く．
5．グーディーといい，清潔にし，浄化する．グーとは，投げ入れるという意味である．
6．クースーといい，もう一度浄化する．
7．スシャといい，超度をする．これは，悪い祖先を清める意味がある．

ここまでの儀礼は，穢れを祓う意味合いが強く，「黒の段階」と呼ばれる．ツォビィには，男性の子孫が祖先に借りていた負債をかえすという意味がある．嫁に行けなかった女の死者の霊にもマードゥはあることにはあるが，ツォビィの儀礼は上の「黒の段階」で終了する．また，息子をもたない人の霊についても「黒の段階」で終わってしまう．

8．チィークーといい，山羊を縛る．この山羊は，ここで食べるのではなく，畢摩が持ち帰る．

これは，「花（まだら）の段階」と呼ばれる．すなわち黒と白の中間の段階である．

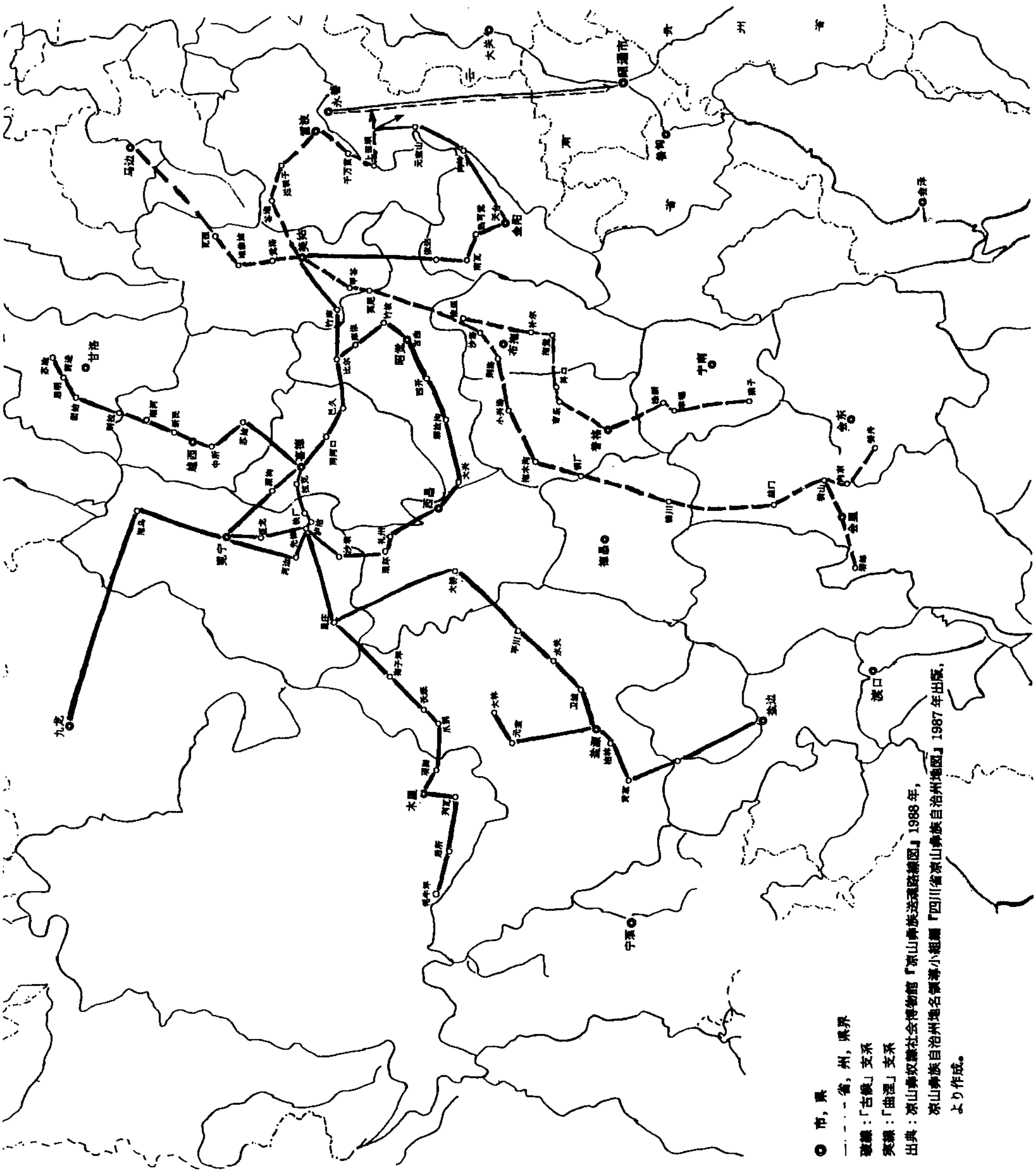


図５　凉山彝族送魂路線図

9．ニーホーといい，除穢をする．
10．チューツゥといい，古いマードゥを「黒の段階」で作った新しいマードゥと入れ替える．古いマードゥは山洞に移す．
11．シャといい，祖先を頌める（頌徳）．
12．ジィーツゥといい，生殖力の繁栄の儀式である．松の木を切ってきて，男性たちが，取り囲んで座る．枝の数は奇数にする．これは，子孫が多いことを示す．
13．チェといい，マードゥをならべる．木を割って，その中にマードゥを配列する．夫婦つまり父母のマードゥは，かならず１対ずつ組にして入れる．この時に，先に死んだ妻（夫）と，その夫（妻）のマードゥを一緒にしてやる．もし女の子供しかいなかった場合は，そ

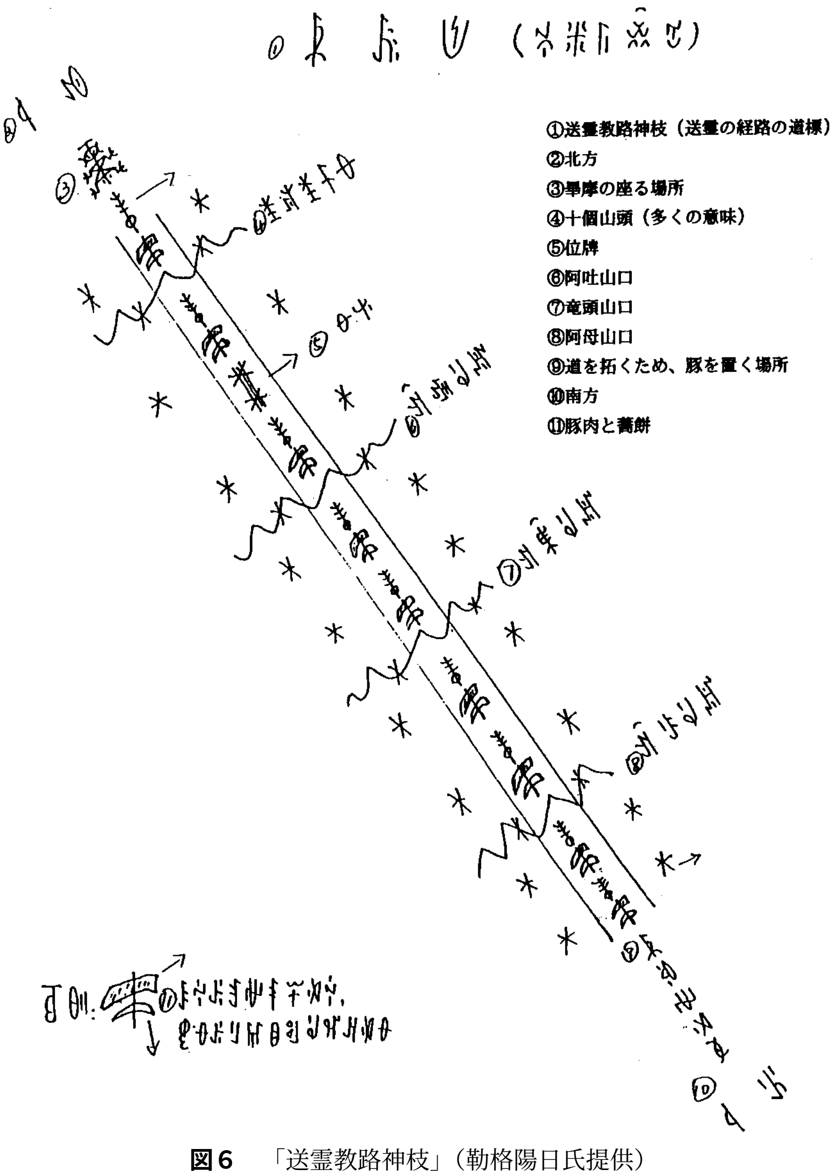


図６　「送霊教路神枝」（勒格陽日氏提供）

の人（死者）のマードゥを中にいれてやることはできない.

14. ボーといい，ムンボオと称する雄の豚とチョッと称する雌の綿羊を殺して，２頭をくみあわせて，交尾させる.
15. シンムガンツといい，祖先の霊つまりマードゥを背負って,決められた山の岩穴まで行き,祖霊を送る．女性はついて行かない.「送霊教路神枝」（図６）を参照する.

以上の9から15は,「白の段階」と呼ばれる．以上15の段階は黒から花を経て白にいたるように構成されている.

ツォビィは，普通は農暦の11月から3月の冬場に行うことが多い．これは祖先をまつる必要がある時に，臨時的に行うので，定期的ではない.

彝族に伝わるマードゥディエとツォビィの由来に関する有名な神話によると

> 「大昔，人々は生まれても父を知らなかった.雪源の子である施納が七世代目となり,代々父知らずであったが，八世代目の石爾俄特は父を捜すために９人の供をつれて,９本の銀貨と９本の金貨を持ち，９つの銀粉袋と９つの金粉袋を背負わせて運ぶ．狐は供の銀粉袋の後を，兎は供の金粉袋の後を，それぞれ早く見つかるようにとついてくる．イェムジェレという所に来た時，美人で賢い施色という娘に出会った．施色は石爾俄特に一つのなぞなぞを出した．そのあと施色は石爾俄特に“まず祖先のマードゥディエとツォビィをして祖霊を祭祀すること．その後自分の住居に戻って娘をもらって結婚して子どもが生まれたら父に会える”と教えた．後に石爾俄特は施色を嫁にして，三人の子どもを持った．その後儀礼を行い第三世代目になってチェブージューム（父）となったのである.」[16]

この神話は，彝族の先民が母系社会から父系社会に転換したという史的事象として解釈されてきた．こうした解釈によれば,「マードゥディエ」と「ツォビィ」は本来，父系氏族の血縁の紐帯を維持するために生じた祖先崇拝の盛大なる儀礼であると考えられる．諺に「父母欠児子的債是給他娶一个媳婦（父母の息子に対する借りは，彼に嫁をとって返すこと）」「児子欠父母的債，是給他死後，安霊（息子の父母に対する借りは，彼らの死後，マードゥディエを行って返すこと）」[17]とある．多くの地区では家族の曾祖父以下三代のマードゥを一緒にして送霊の祭祀を挙行する古い慣習を伝えている．これは彝族社会が私有制奴隷社会に入って，氏族が個々の家族に解体したにもかかわらず，原初氏族社会から形成されてきた共同血縁の観念が消滅しなかったことを物語っているとも言われている.

５．関連する聞き取り調査

調査日時：1997年8月12日午後

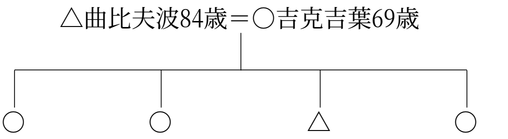
インフォーマント：曲比勒什氏，男性，49歳，畢摩，河古洛郷洛覚村で，聞き取り調査．60代続いた畢摩の家柄で，11歳の時から学び，19歳で畢摩として独り立ちした．通訳者は勒格楊日氏.

一．葬送儀礼の特例「イホ」（英霊を讃える）について

彝族の葬送儀礼では，特に有名な人，たとえば扎夸[18]，蘇易[19]，徳古，畢摩などといった死者には，一般に祭司畢摩を招請して,「イホ」という儀礼を行う.「イ」は「大」で「長老」の意味,「ホ」は讃えるといった意味である．従って「イホ」は英霊を讃えることである．彝族では,「木も大きければ風当たりも強くなる（地位が高くなれば攻撃の目標になりやすいのたとえ)」ので，名声あるものは必ず批判され，あるいは忌まれ，けがされ，なお罵られ，呪われがちであると考えられている．彝族の観念では，それはすべて人にとって不利益なことで，そういう死者に特別の讃辞を唱えないと，死者の霊が帰祖しにくく，生者にも災いをもたらすことになると考えられているのである．それゆえ，畢摩，扎夸，徳古と蘇易などの忌中の家は，こうした儀礼を行わなければならない.

「イホ」儀礼としては，普通主祭者がまず音頭をとり，補佐の祭者がこれに和して唱う．唱われる経文と「伊嗬特伊」の主な内容は，祖界へ帰り，鬼にならず，妖怪や化け物の話に耳を貸さず，畢摩の話を聞くことを死者の霊に教えるものである．また茶碗一杯の水と１本の魂草で畢摩と畢惹[20]に招魂をする．もしこれを行わなかった場合，彼らの魂は死者の霊に追従してしまうおそれがある．1996年の初冬，洛覚という村の曲比夫波氏の老人（84歳）が病気で亡くなって，曲比勒什氏という畢摩は，曲比夫波氏に「イホ」儀礼を行ったという．

曲比夫波の家庭状況：
死者：曲比夫波84歳
妻：吉克吉葉69歳　　息子：1人　娘：3人



曲比夫波氏の葬送儀礼の過程は次の通りである．

1．「モジチュエ」：開路と案内のこと．死者が息絶えると，家族は一匹の角の曲った雄羊（去勢せず）で開路儀礼を行う．彝族の観念では，角が丸くねじ曲がった羊には死者の霊の帰祖の案内ができ，その曲がりくねった角は祖界への途上で出くわす障害から死者の霊を守ってくれるという．その後，この開路の羊は犠牲として打ち殺され，「ソーフーシー」という儀礼を行う．すなわち，その羊を煮て肝臓を取り出して死者に供えて祀るのである．
2．「イホ」：死者の霊を讃えること．
3．「ムズー」：馬を送ること，即ち駿馬を一頭選んで，死者の霊のために送り，その上に乗って速く祖界へ帰るようにする．畢摩は「木茲特伊」という「送馬経」を唱える．その前に，水やトウモロコシや苦蕎麦などの食糧くずを馬の体に撒いて経文を唱え始め，馬の体が震えるまで唱え続ける．この震えは死者の霊が馬に乗って祖界へ帰り始めたことを表す．その後，「伊嗬特伊」を唱え続ける．
4．「プスプサ」：送霊帰祖（死者の霊を祖界に帰らせるよう送ること）．
5．「プホプハ」：分魂，死者の霊をある所まで送って，畢摩は読経して生者の魂と死者の霊を分け，生者が死者を惜しんで一緒に祖界へ行かないよう勧める．（それから，忌中の家は火葬の準備をし，薪きを割ったり，火葬場を占ったり，生け贄を殺し，肉を煮る．この肉は祭祀にくる親友を招待するためのものである．）
6．「イークゥ」：招魂，招魂鶏一羽と招魂草一本を用いて，親友や子孫や近所の人の魂を招き返す．イークゥが終わった後に，鶏一羽を嫁に行った娘にやり婿の家に持ち帰らせる．
7．出棺：イークゥが終わると，すぐ屍体を担いで火葬場へ行って火葬を行う．馬を引いている者（昔は奴隷）が先頭に立ち，それから火をつける者，そして屍体を担ぐ者，親友，隣家の者という順で行く．畢摩はそこに行ってはならない．途中で馬を放して，特定の者が馬を引いている者の「天菩薩」[21]をつかんで帰らせ，その魂を死者の霊と一緒に行かないようにする．馬を引く者の選定はややきびしく年齢と相位が死者と一致していなければならず，しかも必ずその家支の者でなければならない．死者の息子は，一袋の炒ったそば粉を背負い，頭に大きな「ズーティエ」という男性用のハンカチを巻く．途中，親族がその「ズーティエ」を引いて帰り，背負ったそば粉は屍体担ぎのかごに置く（死者に持たせて，祖界へ帰る途上の食糧とすることを意味する．
8．「リュエツーグォ」：鬼を追い払うこと．生け贄には豚一頭を用いて，家の中で儀礼を行う．目的は，断気鬼[22]の「アススゥオーバー」を追い払うことにある．彝族の言葉では，畢摩は泥で「ドーク」という犬形の断気鬼を作り，その泥犬の断気鬼を呪う，そしてまた鬼板[23]（図７参照）を描き，火葬場の下の方に差し，その鬼板を死者に付き添う品とする．
9．「クス」：穢れを祓う意味．

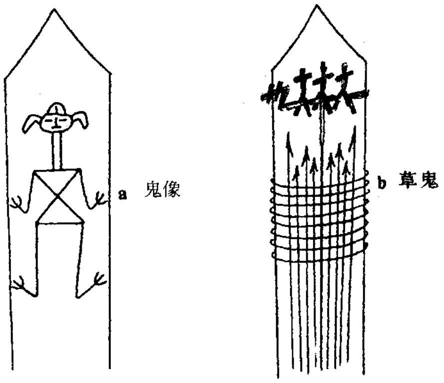


図７：「鬼板」
『彝族原始宗教調査報告書』参照

10.「マードゥディエ」：火葬の翌日に行い，一般の畢摩はこの儀礼を行ってはならないので，祭司である覚洛という村の吉克格布畢摩に頼んで，儀礼を行ってもらったという．儀礼は普通吉日を選ぶが死者は名高い（民国時代，かつて漢民族地域で仕事をした）ので，もし鬼になったら大変なので，早急に儀礼を行わなければならない．

11. 競馬と相撲：競馬は主に評判を高めるために行われ，規模が大きいほど儀礼も大きい．賞品は羽根織毛布である．相撲は忌中の一族と婿の一族の間で主に双方の力を示すために行われる．会葬者は盛装である．彝族の観念では，「全ての生命は誕生したら，必ず死ぬ」ということの繰り返しである．生と死が密接な関係にあり，葬送儀礼では，死者の子孫が多いほど，死者の霊は喜ぶという理由で，競馬や相撲を行う．これは死者の子孫が多く，気勢も上がることを表し，「死者にみせる」意味がある．人々が精一杯遊ぶのも死者の霊を楽しく祖界へ帰らせるためである．昔，「ツォビィ」における「ホージュエ」（場所移転）儀礼では，美男美女コンテストも行われた．その村の曲比瑪瑪[24]の父と父の妹はある「ツォビィ」で二人とも選び出されて「カバ」（銀のこと．すなわち，当時に流通した貨幣である）という賞を獲得した．その父方は有名な「徳古」と「扎夸」でもあり，そのおば（父の妹）は女性の「徳古」で賢明で貞淑な美人であるばかりでなく雄弁でもあり，村の人々の紛糾を巧みに和解させるので，あらゆる面で褒め称えられた．

12.「スーチュエソー」：死者の霊の変化を占うこと．曲比爾鉄氏という蘇尼は，この儀礼の司会をした．スーチェシェは出棺の日（犬の日）に行われた．彝族の諺によると「クムラスォド」とは，死者の生年月日時を示す干支の暦本にある適性表（『彝族風俗志』の婚礼編を参照）で占う．また没年月日時（猿の日）と生まれた年月日時(虎の日)にもよる．蘇尼[25]によって占われ，火葬されてのち，曲比夫波氏の魂は一羽の白鳥となり，家を離れた時鷹となったので，翼（飛ぶことができるもの）をもつものの類で，大吉であるとされた．

二．畢摩の教育職分について

彝語の諺には，「君長知識以千計，謀臣知識以万計，畢摩知識無以数計（君長の知識と言えば，千で数え，策臣の知識と言えば，万で数え，畢摩の知識と言えば，数えきれぬ）」という．畢摩は，彝族社会の知識階級と文化層の代表であり，また彝語で畢摩は「教師」という意味をもつ．彼らは文化や知識に習熟し，彝文文字で書かれた経典に精通し，また天文暦法，系譜，倫理，史詩，伝説，神話，物語の典籍を熟知する．そのため畢摩は彝族社会における信仰儀礼に従事する，神と人間の間の意志の媒介者であるのみならず，社会における知識を主管する存在でもある．したかって，畢摩は，彝族の人々の生活の多方面につながりをもち，生死婚姻，吉凶禍福などすべてが畢摩の施術なしには済まされない．そのために畢摩は人々に尊敬され，一定の威望をもつ．その職分もかなり広範囲で，さまざまな面におよび，その教育対象は彝族社会の各階級に至り，トップの茲莫[26]から下の師匠や奴隷にまで及び，畢摩階級自身も含まれる．

１．畢摩による畢摩に対する教育：例えばこの調査より一ヶ月前（1997年7月20日）に同じ村の畢摩曲比達戈の息子（9歳）が病気で突然死去し，曲比達戈は非常に悲しんだ．しかも，

写真８　「畢摩の経典の一例」
美姑畢摩文化研究センター蔵　1997年8月撮影

写真９　「畢摩経典の写経」
1997年8月撮影

彼は，自分の息子が病気にかかった時，あいにく他人に儀礼を施しに行っていたため，息子の最期に立ち会うことができなかったのである．そのため，息子さえも救えず畢摩（その職分の一つは神的方法と薬の方法で病気を治療すること）としても恥ずかしいと思い，もう二度と畢摩をやりたくないと語ったという．すると畢摩曲比勒什は，曲比達戈をこう教え導いたという．「酒の発酵が良ければ，一杯飲んだだけで満ち足りる．有用なこどもは一人で十分である（助かる）．」また「茲莫はひとり子を好む（茲莫は，子が多いほど，後にその後継者になろうと兄弟同士が激しくせめぎあう）」などと言い慰めた．

２．畢摩は死者の霊を諭すと同時に生者も教える．このことは，畢摩経典の中でよく見られる．（写真８，９参照）

３．畢摩は生者のみならず，鬼をも教える．葬送儀礼では鬼を駆除するさまざまな儀礼を行なう．畢摩曲比勒什はそれが人の障害にならないように鬼を教えたが，その教育的役目を生者に対するものと同様に考えている．また，現世の規範にもとづいて，鬼に害されやすい様々な不正の行為を示すが，鬼を駆除することが現世の不正行為をなくす意味を持つと考える．それゆえに，こういう儀礼さえも象徴的なものと見られ，その注目すべき点は，現世の現実生活に対する客観的な教育という役割も伴っているということである．

６．涼山彝族の死生観

彝族においては，死と生に関する観念は極めて自然なものであり，「全ての生命は誕生したら必ず死ぬ」というものである．彝族の葬送儀礼の規模は，死者の年齢によって定められる．彝族の習俗によると，葬送儀礼は年配者になるほど盛大な儀礼になり，青壮年の場合は普通の儀礼しか行わない．これは，生前，社会的に尊敬されていた老人とは異なり，若死にした人は天寿を全うできなかったため盛大な儀礼を受ける資格がないと考えるためである．彝族の人々は幼い頃よりこうした考えに慣れ親しんでいるため，年配者の逝去に対して，まるで遠くからきた高貴な客を送り出すように自然な気持ちで盛大な葬儀を行う．また，その際それほど悲しみを感じず，まるでお祭り騒ぎのようでさえある．彝族にとっては，生と死は人生の法則と見なされるのみならず，万有の自然な現象としても見なされている．

万物全てが死ぬ．
太陽も死すべき存在である．
日没は死を意味する．
月もまた死すべき存在である．
月はその満ち欠けにより生と死を繰り返す．
石も死すべき存在である．
風化は死を意味する．
河もまた死すべき存在である．
涸れた河は死を意味する[27]．

彼らは，人が生を受け，そして死ぬという事実

を真摯に受けとめている.生と死は連続しており,自然の摂理に従うもので,決して人為は及ばない.即ち彝族は，この世に存在する全てのものに死が訪れるように,人間もいつかは死ぬと考えており,死を「竹の子が竹になり，枯れ葉が木の枝を離れる」[28]ように自然で人間の力がおよばないものだと考えている.

7．涼山彝族の霊・魂観

彝族の人々は「霊・魂は永遠に不滅である」という観念を強く持っている.伝統的な考え方では,影は魂によって存在し，魂は影を通じて，その姿を現す．すなわち，影がなければ，魂はないのである．生存中は魂が肉体に附着し，死後は肉体から遊離した魂がこの世をさまよい，死者の霊を変化させる．時には変死者の霊が鬼となって，しばしば人に祟り，災いを及ぼすこともあると考えられる．もし鬼となってしまったら，早々に儀礼を行わなければならない.

彼らは，生前すでに三つの魂（「イー」「ナァー」「ナァーコー」を持つが，死後も魂は三つに分かれて存在し（「ナァーコー」「ナァージュー」「ナァーイー」；但し生者の三魂とは一対一関係にはない)，それらを信仰している.

生前の三つの魂は,「イー」(感覚を調整する),「ナァー」(挙動を支配する）「ナァーコー」(肉体を支掌する)[29]．個人の身体以外で，より重要なものは，人の生活を支える魂だとされる．もし魂が体から離れると，身体がどれほど強靭であっても生存していくのは難しく，最終的に死んでしまうという.

人は死後, 三つの魂となり, 一つは位牌を守り,一つは墓を守り, 一つは祖先に会うという．また,人は死後，三つの魂となり，ナァーイーは祖先の地に帰り，ナァーコーは火葬場を守り，ナァージューは風に流されてゆくとある.「ナァーイー」は賢い魂を意味し,「ナァーコー」は愚かな魂を意味し,「ナァージュー」はその中間の魂を意味し，マードゥディエの時に，畢摩が作ったマードゥに憑き，家の中にまつられる[30].

この魂の変化は，霊の変化の段階と，きわめて複雑な形で関係している．すなわち，上述したように死後魂は直ちに墓と位牌と祖界に分かれて存在するのだが，それとは別に，死者の霊はボーディエの後墓の周辺を漂っている．これを「ススォイーナ（遊霊)」という．この遊霊に対してマードゥディエが行われることで，この霊は「プピマードゥ（家霊)」へと昇格する．さらにこの「家霊」に対してツォビィが行われることで，最終的に死者の霊は「プイピイ（族霊)」となるのである.

すなわち，ボーディエに際しては，この儀礼の場（墓）には「ナァーコー」という魂と「遊霊」が漂っていることになる．そしてマードゥディエは，この「遊霊」のみを対象としこれを「家霊」

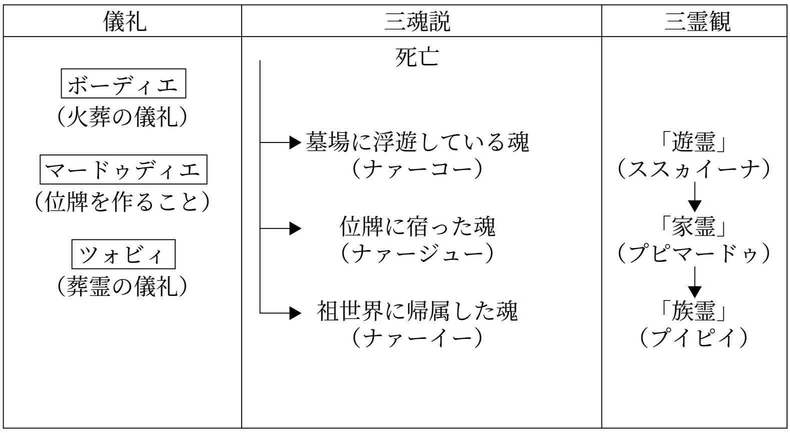


図８　三つの儀礼と三つの霊・魂の関係

へと昇格させて，すでに「ナァージュー」という魂が宿っている位牌にさらに付着させるのである．他方，「ナァーコー」はこの儀礼の後にも墓を守りつづける．従って，マードゥディエの後には，位牌には「ナァージュー」という魂と「家霊」が宿っていることになる．

さらに，ツォビィにおいては，位牌に宿っている「家霊」のみを「族霊」へと昇格させ，象徴的な形で，すでに「ナァーイー」という魂がいる祖界へと送る．この場合も，もともと位牌に宿っていた魂「ナァージュー」は，新しい位牌に移され，家の中の位牌を守りつづける．従って，ツォビィの儀礼の後，祖界には魂「ナァーイー」と「族霊」が存在することになる．ここで霊・魂は，祖先たちとともに暮らし始めて「永生」に至るのである[31]（図８を参照）．

８．涼山彝族の祖界観と祖霊信仰

涼山彝族の霊・魂観念は，輪廻転生の思想を伴わない．彼らは，祖霊による庇護を願い，その祟りを免れるために，死者のためにツォビィを行い，死者の霊を祖界ズーズープウという地方へ送り出し，そこで閑かで楽しい生活を送らせる．付け加えるならば，彝族においては，生前，父親の方が身分が高いが，死後は，母親の方の身分が高くなるという．おそらくこのことは，母系制から父系制への発展と関係しているものと思われる．

彝族では，死者の霊は決まった道筋を通って，まさにこの祖先の地である雲南省に戻るという．この祖界という楽土は，人生の最終的な拠り所とされており，従って死後，霊が理想の世界へ赴くこと－祖界への到達－は，遠い祖先の霊との団欒を意味するのである．祖界への信仰は，人々の意識の中に，伝説の民族発祥の原点に戻りたいという欲求が存在していることを示している．このように，彼らの祖界観においては，現実と信念とが互いにオーバーラップしているのである．

また，彝族において，祖界は非常に豊かな理想世界として描き出されるが，しかし他方で，祖界は現世世界のイメージにもとづいて形成されているため，この二つの世界は，彝族の観念においては非常に似通った姿をしている．

このように祖界が固く信じられていることは，他の面からもわかる．それは，彝族の人々が生前から死後の祖界での生活に使うための品々を用意することである．彝族の人々は，中年になると自分のために「スームーチューカー」（死装束）を準備する．彼らは，もしこの準備が間に合わなければ，死ぬときに鬼に変わりやすくなると考えている．また高齢に達した彝族の老人には，その子供たちがボーディエの際に必要な生け贄（牛，羊，鶏など）をあらかじめ用意する．生け贄はボーディエで参列者によって食べられるが，こうすることにより，死者が祖界にいった後も食べ物に不自由しないとされている．またこうした意味の生け贄とは別に，死者が生前に自ら準備する羊もある．これは，死者を道中の魔物から守り，祖界へ無事に導いてくれるものとされる．さらに，死後に身につける衣装，その他あらゆるものは，同じく死者が生前に自ら準備する．このように，祭祀品の用意にはまさしく彝族の祖界での生活に対する信仰が表れており，ここから霊が存続していくと信じて疑わないことがわかる．

葬法もまた彝族の人々が祖界の存在を信じていることを示している．彝族の火葬と祖霊観には密接な関係がある．四川涼山の彝族の考えでは，祖先の居住地は東方にあるため，火葬時に遺体の頭を東へ向ける．こうすると，死者の霊は炎火の中で永遠の命を得た時，頭をあげるとちょうど東方を見ることができるのである．そしてスムーズに火葬で死者の霊を東方の祖界へ送り届けることができるのである．この火葬時の死体の向きと祖先の発祥地は関係しており，また先人が移住してきた道筋とも関係している．それは死者がゆく方向を表し，その霊が行くべき方向を示すからである．その他に，ボーディエの中で男女の別により死者の寝かせ方が異なることにも彝族の祖界観があらわれている．生者が死者の死体を置くとき，死体はわき腹を下にして横にし，男性なら左向き，女性なら右向きに寝かせる．その意味は，男性は祖界において右手で使う刀弓の使用を妨げないようにし，女性は祖界の生活で糸をつむぐとき紡錘を掲げる左手を妨げないようにするということである．彝族の信仰では，霊は祖界に着いた後もこの世と同じように労働をしていかなければならない

とされる．また人の死後，家族は死者の容貌を整え，新しい服に着替えさせ，その足を折り曲げる．さらに，死者の手に生け贄の羊肉をにぎらせ，両手を拳の形にして胸で交差させる．それと同時に口に銀を入れ，死後の祖界での裕福な生活を願う．この銀を彝族で「チュイクーツー」という．この習俗には，死者の霊が祖界に帰った後も幸福で，子孫を加護してほしいという願いが込められている．このような葬法に見られる特別な習俗もまた，彝族の信仰に存在する二つの世界（現世と祖界）の対応と相似を証明している．

彝族の信仰観念では，祖界は美しく豊かな国であり，この世と同じ様な仕組みを持つとされる．その際，「彼岸」即ち祖界での生活は，「此岸」即ちこの世の実生活をモデルとしていることがわかる．このことは，祖界が，祖霊たちの世界であると同時に，現実の雲南の地でもあるという点にも現れている．こういう二つの世界の類似と対応によって，逆に彝族の人々は，祖界での真の生活というものを，遠いユートピアとしてではなく，身近で実現可能なモデルと見なしうるのである．

9．おわりに

私の学問的探求心は徐々に彝族文化の研究へと向かい，大量の彝族文献と先行研究を踏まえて，1997年の夏，大凉山に赴き一ケ月の現地調査を行った．そこで私は凉山彝族の文化風土を目の当たりにし，さらに凉山彝族の文化が自然に則したものであること，また凉山彝族の歴史，信仰，生産活動など各方面に内包される豊かな思想についての理解を深めることができた．同時に，凉山彝族の社会発展と近代化の過程で生じた様々な文化変遷も眼にした．この経験は，私の研究対象である彝族の葬送儀礼研究に自信を与えてくれるものであった．本稿では，現地調査での聞き取りをもとに，畢摩による葬送儀礼の伝統について述べた．長期にわたる現地調査が困難であるにせよ，やはり，実際の葬送儀礼の全過程を見ることができなかったことは残念であった．今後の調査では，豊かな伝統儀礼を保っている地域に限定して，儀礼と経典に深い知識を持つ畢摩とともに，彝族の葬送儀礼について，実際の儀礼の全過程を見，口頭表現も含めて，細かな意味を押さえていく作業が必要になるだろう．

付記：最後に，私は修士論文に必要なフィールド・ワークにおいて，基礎となる多くのものを用意し，特に理論面での研究を指導して下さった恩師藤川信夫先生には，心からお礼を申し上げたい．また，フィールド・ワークに付き添って下さった中国社会科学院少数民族文学研究所副研究員巴莫曲布嫫女史，さまざまのコメントとアドバイスをして下さった凉山彝族自治州彝族研究所研究員馬爾子氏，また聞き取りに際し彝語から漢語への通訳をして下さった美姑畢摩文化研究センターの勒格陽日氏（現地の畢摩文化研究者），さらに，フィールド・ワークを行うにあたって数えきれない協力とご支援とをいただいた方々にも感謝の意を表したい．

注

(1) 彝族の祭司．畢摩は最初においては黒彝出自の畢摩が多かったが，時代が新しくなるにつれて，その社会的地位が次第に下り，白彝出自の畢摩が多くなるとともに，黒彝の畢摩が非常に少なくなっていった．

(2) 父系の血縁紐帯組織で共通的父系祖先と父子連名の系譜を持つ．

(3) 彝族の部落の長老(糾紛を専門的に解決する人)．

(4) 馬学良，于綿秀，範恵絹『彝族原始宗教調査報告書』中国社会科学出版社，1993年，305頁．

(5) 火葬を中心とした一連の過程を包括する儀礼である．

(6) 位牌を作る儀礼．

(7) 死者の霊を祖先の住む世界へと送る儀礼．

(8) 畢摩文化研究センターの摩琵磁火氏によれば，葬送儀礼の規模は，死者の死亡年齢に応じて三段階に分けられる．即ち，少年（15歳以下），中年，老年（50歳以上）の順で規模は大きくなる．

(9) この羊は死者が生前に自ら準備したものである．付言すれば，今回インタビューしたすべての畢摩によると，死者が51歳以上の場合，死後に身につける衣装，その他あらゆるものは，同じく死者が生前に自ら準備する．

(10) 阿古荷とは，万物の由来を歌うこと，例えば，生と死の由来，人の由来など.
(11) 神枝とは，死者の霊の依代（よりしろ）を示す枝のことである.
(12) 吉克・爾達・則伙『我在神鬼之間—一個彝族祭司的自述』雲南人民出版社，1990年，170頁.
(13) 馬学良，于綿秀，範恵絹『彝族原始宗教調査報告書』中国社会科学出版社，1993年，207頁.
(14) 伍精忠『涼山彝族風俗』四川民族出版社，1993年，125頁.
(15) 祖霊化儀礼．仏教で対応するのは済度である.
(16)『勒俄特依』馮元尉訳，四川民族出版社，1986年，69～78頁.
(17)『涼山彝族自治州概況』四川民族出版社，1985年，30～31頁．何耀華『中国各民族原始宗教資料集成』彝族巻，134頁より引用.
(18) 勇ましい武士.
(19) 政治的指導者.
(20) 畢摩の補佐役.
(21) 額中央上部の髪の毛がある部分を指す．彝族では，その部分は特に神聖視されており，切ることはもちろん他人に触らせることもしない.
(22) 息を止める鬼のことである.
(23) 板に鬼の顔を描いたものである.
(24) 筆者が現地調査に行った際に，お世話になったご主人である.
(25) 蘇尼（スウニ）とは巫師であり，その職責はもっぱら跳神，鬼祓い，病気治療などであるスウニは経典に通じず世襲でも師弟間の伝授でもない．スウニは男女いずれでもなれる．そのため「師娘子シニアンズ（婦女に対する古称の一種）」という称呼もある．彼（彼女）らは自分の祖師を崇拝する．おもな法器は羊皮太鼓である．彼（彼女）らも畢摩と同様に生涯労働に従事する．巴莫姉妹彝学研究小組（編著）『彝族風俗志』中央民族学院出版社，1992年，182頁.
(26) 茲莫＝君主・大臣，諾伙＝黒彝，曲諾＝白彝，阿加＝安家奴，呷西＝鍋庄奴とはかつての涼山彝族社会内で分けられていた五つの階級の名称である．黒彝とは貴族であり，曲諾以下三階級はすべて白彝であり，非支配民の農民と奴隷である.
(27) 阿魯斯基氏，摩琵磁火氏，勒格陽日氏による．1997年8月6日，西昌市で聞き取り調査．漢語を使用．及び1997年8月8日，美姑県で聞き取り調査．漢語を使用.
(28) 阿魯斯基氏，摩琵磁火氏，勒格陽日氏による．1997年8月6日，西昌市で聞き取り調査．漢語を使用．及び1997年8月8日，美姑県で聞き取り調査．漢語を使用.
(29) 吉克・爾達・則伙『我在神鬼之間—一個彝族祭司的自述』雲南人民出版社，1990年，78頁.
(30)『彝族祖霊信仰研究』，6頁，下段注③.
(31)『彝族祖霊信仰研究』，10頁.

先行研究・引用文献

[1] 胡慶鈞著（1985）『涼山彝族奴隷制社会形態』中国社会科学出版社
[2] 涼山彝族自治州概況編写（1985）『涼山彝族自治州概況』四川民族出版社
[3] 馮元尉訳（1986）『勒俄特依』四川民族出版社
[4] 美姑県地名領導小組編（1987）『美姑県地名録』四川涼山彝族自治州
[5] 孫若博主編（1990）『中国少数民族教育学概論』中国労働出版社
[6] 吉克 爾達 則伙（1990）『我在神鬼之間』雲南人民出版社
[7] 巴莫姉妹彝学小組編著（1992）『彝族風俗志』中央民族大学出版社
[8] 馬学良 于綿秀 範恵絹著（1993）『彝族原始宗教調査報告書』中国社会科学出版社
[9] 左玉堂 陶学良主編（1993）『畢摩文化論』雲南人民出版社
[10] 伍精忠著（1993）『涼山彝族風俗』四川民族出版社
[11] 朱文旭著（1993）『彝族文化研究論文集』四川民族出版社
[12] 巴莫阿依著（1994）『彝族祖霊信仰研究』四川人民出版社
[13] 王昌富著（1994）『涼山彝族礼俗』四川民族出版社
[14] 馬林英著（1995）『彝族婦女文化』四川民族出版社
[15] 何耀華主編（1997）『中国各民族原始宗教資料集成・彝族巻』中国社会科学出版社

Abstract

A Report on an Investigation of the Funeral Ceremony of theYi Society in Da Liangshan China

Presenter: Xiu Li FAN
Graduate School for International
Development and Cooperation,
Hiroshima University

Summary

In this investigation, a field work, in Da Liangshan Yi Zizhiqu, Si chuan China, was done from July 26 to August 28 in 1997 under the theme of "A consideration about the function of the funeral ceremonies for character-building in the society of the Yi in China". This is a report on the investigation which I carried out in the field with other

Researchers of Bimo culture by interviewing the priests called Bimos.

The contents of this report are as follows;

(1) The Cultural Background of the Yi in Da Liangshan District.
(2) The Three Types of Da Liangshan Yi Funeral Ceremonies: Boddie, Madduddie, Cobi, and the unique Yihe.
(3) The Yi View of Life and Death
(4) The Yi View of the Soul and Spirit : The Yi's Theory of Three Souls and Theory of Three Spirits.
(5) The Yi View of the Land of Ancestors and Belief in Souls of Ancestors.